

教養プロジェクト

(1980年までの小説)

経済学部2年 佐々木詢平

作品リスト

- 1「侏儒の言葉」芥川龍之介 6「変身」カフカ・フランツ
2「坂の上の雲」司馬遼太郎 7「地獄の季節」ランボー
3「銀の匙」中勘助 8「月と6ペンス」モーム
4「空知川の岸辺」国木田独歩 9「蠅の王」ゴールディング
5「生まれ出ずる悩み」有島武郎 10「不思議な少年」トウェイン

1. 侏儒の言葉

- 芥川龍之介(1892～1927)による箴言集
- 文芸春秋に1923年から27年まで連載
- ビアス「悪魔の辞典」の影響を受けている

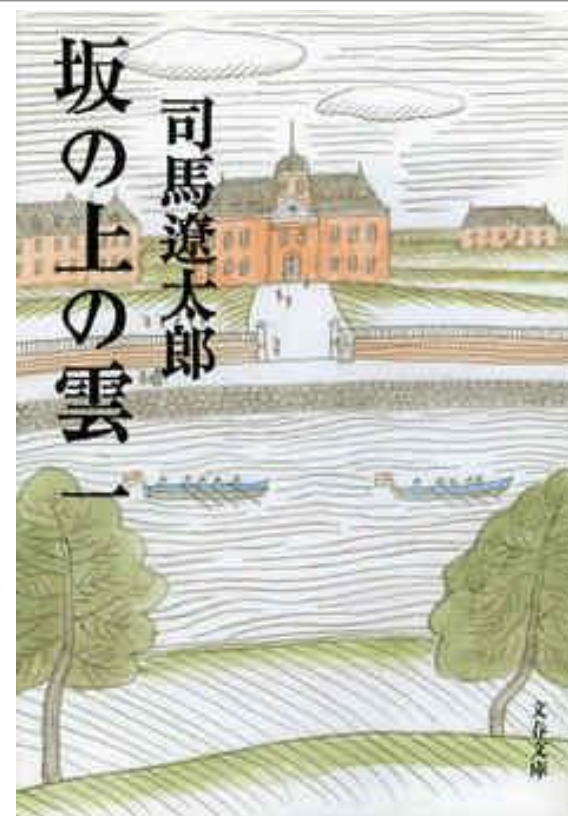


1. 侏儒の言葉

- 「輿論は常に私刑であり、私刑は又常に娯楽である。たといピストルを用うる代りに新聞の記事を用いたとしても。」
- 「危険思想とは常識を実行に移そうとする思想である。」
- 「天才とは僅かに我我と一步を隔てたもののことである。只この一步を理解する為には百里の半ばを九十九里とする超数学を知らなければならぬ。」
- 「人間的な、余りに人間的なものは大抵は確かに動物的である。」
- 「理性のわたしに教えたものは畢竟理性の無力だった。」
- 「眠りは死よりも愉快である。少くとも容易には違いあるまい。」

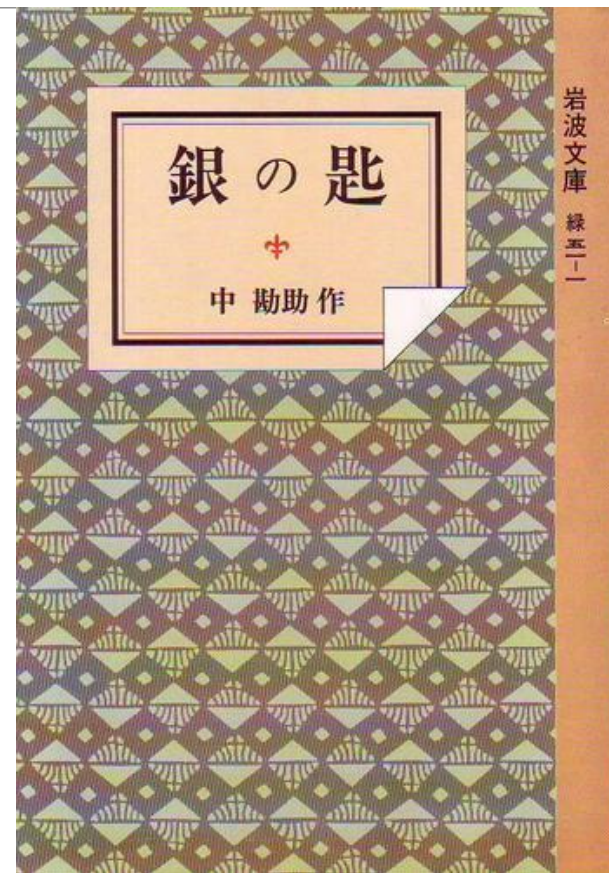
2. 坂の上の雲

- 司馬遼太郎(1923～1996)の代表作
- 1968年から72年まで産経新聞で連載
- 明治日本の軌跡を秋山好古、真之兄弟と正岡子規を通して描いている



3. 銀の匙

- 中勘助(1885～1965)の自伝的小説
- 本棚にしまった銀の匙をきっかけに伯母の愛情に包まれた少年期を回想する



4. 空知川の岸辺

- 国木田独歩(1871～1908)の短編小説
- 土地の選定の為、北海道を旅行した自身の経験から書かれている
- 自然の厳しさや開発初期の北海道に移住した人々の人間模様を描いている



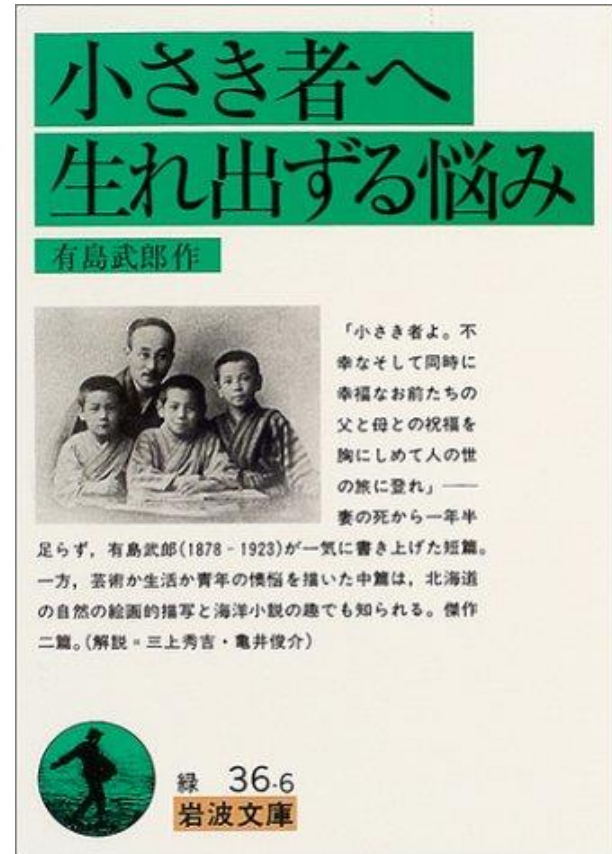
国木田独歩
(国立国会図書館蔵「近代日本人の肖像」)

4. 空知川の岸辺

- 結局、北海道移住計画は離婚した為、頓挫した
 - 妻だった信子が貧しさに堪えかね、親元に帰ってしまい、その後協議離婚に至った。
- ➡ この一連の顛末をモデルに小説にしたのが有島武郎の「或る女」である

5. 生まれ出ずる悩み

- 有島武郎(1878～1923)の小説
代表作「或る女」、「小さき者へ」等
- 札幌出会った少年「君」の生活と苦悩を
通じた心の交流が描かれている



5. 生まれ出ずる悩み

- 「君」のモデルは岩内出身の画家木田金次郎(1893～1962)
- 有島は札幌農学校出身
- 北大の校歌「永遠の幸」は有島が作詞している

6. 変身 (Die Verwandlung)

- カフカ・フランツ (1883～1924) の代表作
- 起きたら巨大な虫になっていた青年とその家族の顛末が語られている



7. 地獄の季節 (Une Saison en Enfer)

- アルチュール・ランボー (1854～1891) の作品

→ 象徴派の詩人



自然主義への反動から生まれた
理想的、観念的に世界を探求する運動



7. 地獄の季節 (Une Saison en Enfer)

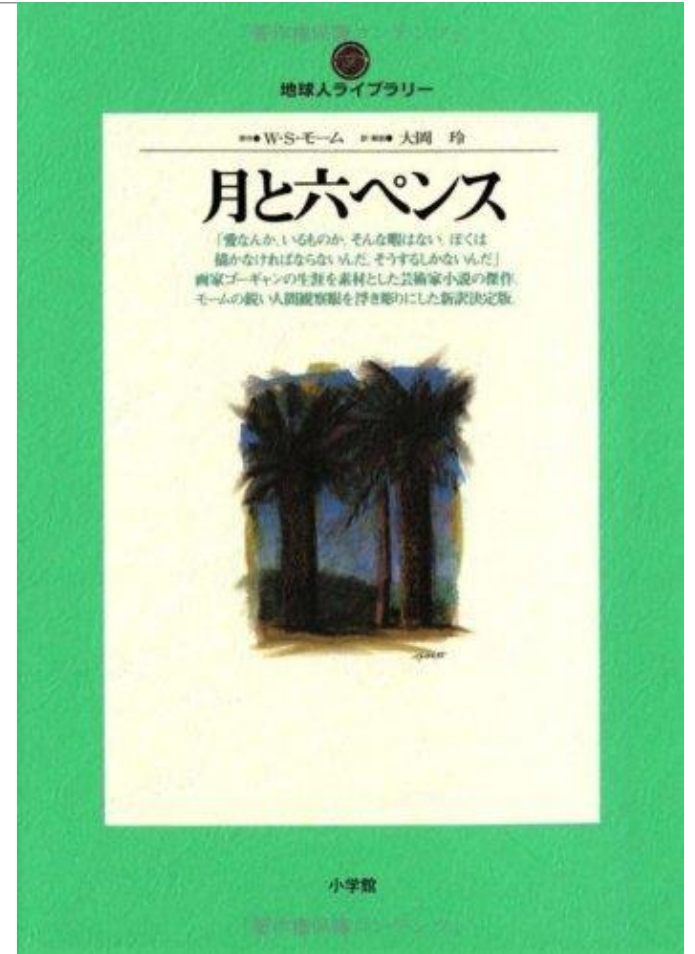
「そら、科学だ。どいつもこいつもまた飛びついた。肉体の為にも魂の為にも、——医学もあれば哲学もある、——たかが万病の妙薬と恰好をつけた俗謡さ。それに王子様等の慰みかそれとも御法度の戯れか、やれ地理学、やれ天文学、機械学、化学……」

科学。新貴族。進歩。世界は進む。何故逆戻りはいけないのだろう。これが大衆の夢である。

俺達の行手は『聖霊』だ。俺の言葉は神託だ、嘘も偽りもない。俺には解っている、ただ、解らせようにも外道の言葉しか知らないのだ。ああ、喋るまい。」

8. 月と六ペンス (THE MOON AND SIXPENCE)

- モーム (1874～1965) の作品
- 芸術の魔力に取り憑かれた男のエゴイズムを描いている
- 男のモデルは画家のゴーギャンである



8. 月と6ペンス (THE MOON AND SIXPENCE)

●世界の10大小説

1. 「トム・ジョーンズ」ヘンリー・フィールディング(英)
2. 「高慢と偏見」オースティン(英)
3. 「赤と黒」スタンダール(仏)
4. 「ゴリオ爺さん」バルザック(仏)
5. 「デイビッド・コパフィールド」ディケンズ(英)
6. 「ボヴァリー夫人」フロベール(仏)
7. 「白鯨」メルヴィル(米)
8. 「嵐が丘」エミリー・ブロンテ(英)
9. 「カラマーゾフの兄弟」ドストエフスキー(露)
10. 「戦争と平和」トルストイ(露)

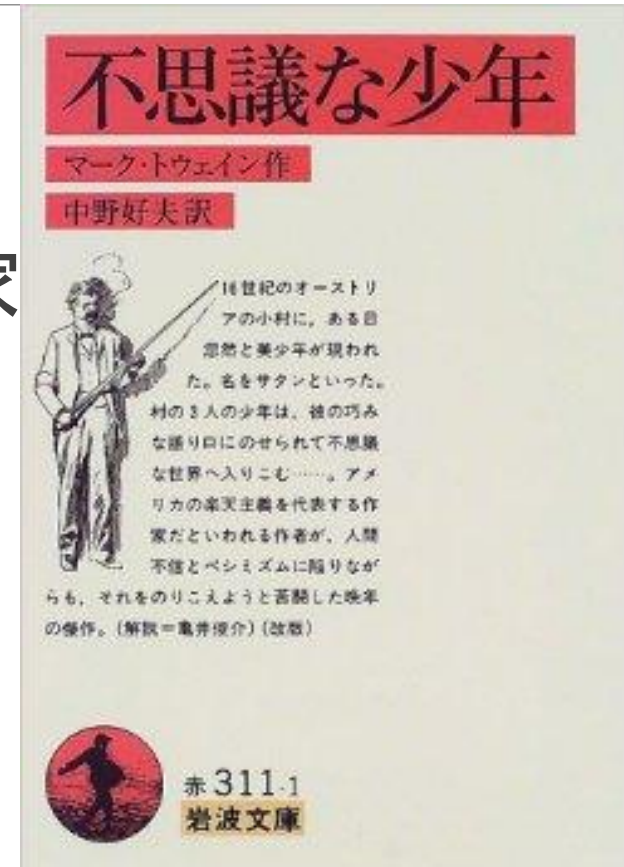
9. 蠅の王 (Lord of the Flies)

- ゴールディング (1911～1993) の小説
53年、ノーベル賞受賞
- 無人島に漂流した子供たちの根源悪が次第に噴出する様を描いている



10. 不思議な少年 (The Mysterious Stranger)

- マーク・トウェイン(1835～1910)の作品
- フォークナー「最初の真のアメリカ人作家であり、我々の全ては彼の相続人である」
- 村に現れたサタンを名乗る少年が村で事件がある度、人間を嘲るという話



10. 不思議な少年

(The Mysterious Stranger)

- 「人間ってやつは、ただくだらないけちな感情と、これも愚劣でけちな虚栄心と生意気さと野心を持ってる、ただそれだけなんだ。笑って、溜息をついて、そして死んで消えちゃう、馬鹿げた、くだらない一生にしかすぎないんだからね。」
- 「とにかく、たいした進歩だよな。(中略)だが、現在のこの文明以外には、まだ大量殺人のうまい方法を発明したというのは、一つとしてなかったわけだよな。もちろん人類最大の野心というのは人間を殺すことであり、現に人間の歴史はまず殺人をもってはじまっているわけだし—それぞれみんな懸命の努力はしてきたさ。」

終わり
